

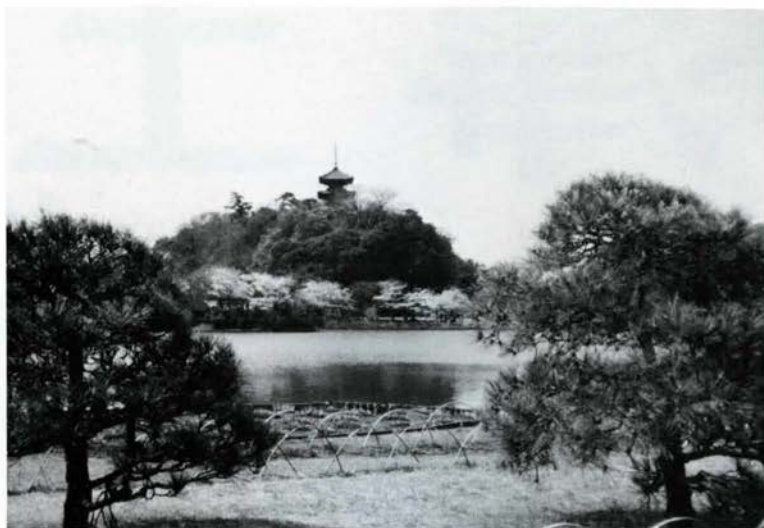
浄土

1983-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (新聞紙類) 第三号
昭和五十八年九月二十五日印刷
第四十九卷

十月号





秋の想い

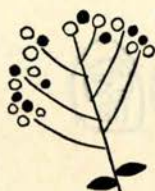
もの想いに沈む、秋。

天高く、青く澄み切って、はるかに遠くすじ雲の現れる大空の雄大さは、まことに格別のすばらしさである。それはまた夜ともなつて、流星が流れ飛んで、澄み渡った大空に美しく星が輝く星月夜にも変化して、大自然の奏でる秋の興趣は、まことに身も心も洗われるような格別の好季である。この実りの秋、秋に臨んで、私たちはそれぞれに意義のある、すばらしい時の移ろいの中に、生きていることのありがたさを確認したいものである。

私は、小杉余子という俳人が、「秋の夜や音なく更けて行くことに」と詠んだように、この格別の好季を、ひとり静かなその想いの時としたい。秋風秋氣に、身と心をたゆたわせて、静かに自己を反省し、明日の飛躍への英気を養ないたいのである。今年は、氣候が何か異常で、突然に暑かったり、雨が長かったり、また社会の環境も慌しく、物騒しさこの上ないが、わが身、わが心に十二分に気配りして、穏やかな秋を余裕をもって味わいたい。

(勝崎裕彦)

|| 十月号 ||



功祚満足することを成じて、威曜
十方に朗かなり。日月重暉をおさ
め、天光隠れて現ぜず。

——『無量寿経』四誓偈

目 次

礫山随想 日々好日……………吉 川 哲 雄……(2)

法 話

お十夜——流浪の果てに……………丹 羽 演 誠……(8)

お十夜法要によせて……………小 滝 隆 定……(13)

<ずいそう>

京都岡崎・吉田界限(-)……………戸 川 霊 俊 ……(20)

(一)(口)(法)(話)

臨終の来迎を願う念仏……………村 瀬 秀 雄……(18)

特別寄稿

念仏とイエスのみ名の祈り……………ポール・リーチ……(25)

お十夜風物誌(上)

——勝ち鬨念仏の寺——……………柴 田 六五郎……(30)

= 読者からの感想とメッセージ =

すばらしい子供の育成をめざして……………若松照雄・桑原法道……(35)

仏國行軍日記

十月の行事……………鷺 見 定 信……(42)

浄土句集……………一 田 牛 猷 選……(40)

<表紙裏・巻頭言> 秋の想い……………勝 崎 裕 彦

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

礫山随想

日々好日



よし かわ てつ ゆう
吉川 哲雄

(東京・文京区伝通院貫主)

浅学不徳の凡僧が無量山伝通院の三門をくぐらせて頂いてから早半歳を経過しました。浄土宗中興の祖了誉聖阿上人のご開山、又明治の排仏棄釈の中にあって全仏教界の棟梁として活躍された行誠上人薫董のみ跡、更に修羅戦乱の巷を治め三百年の太平の世を築いた徳川家康の御母お大の方(伝通院殿贈従一位葵誉光岳智香大禅定尼)の眠ります、この名利の末流を掬むに至りました私にとりまして襟を正して過す毎日であります。昭和の初年当山に於て野沢俊阿僧正統いて木村玄俊上人の薫陶を受け、更に当時寺院の街頭進出として開館し宗教界より瞩目せられた伝通会館に於て、教化の一担を担わせて頂いた者にとりましては戦災により諸堂総て烏有に帰しその灰燼の中から大河内上人による粒々辛苦の結果現在諸堂の整備がなされたのでありますが、静かに眼を閉じる時、往時の輪奐整った旧無量

山の面影が眼底に去来し、うたた感無量なものがあります。と共に、私に課せられた責任の重大さを痛感いたして居る次第です。入山に際しての決意は？ とよく問われますが、無量山復興と云うような大目標を達成出来るような器ではありません。微力な者に出来ることはその種蒔き程度のことであらうと思います。その第一歩は檀信徒に対しての教化であります。法施と財施が両々相寄りて当山の復興も為し得ると信じます。その具体的な出発点として写経道場に力点を置きました。当山の写経は三年前より寺田修造先生の指導の下、月二回開催されて、極めて貴重な教化の場であります。その道場での法話を担当することになりました。入山以来「阿弥陀経」、「法句経」と書写し、現在四十八願の写経に移って居ります。

『浄土』編集氏の依頼によりペンを走らせました折、茶の間のテレビは突如北洋にて通信を絶った大韓航空旅客機はミサイルの攻撃を受け撃墜されたものであり、二百数十名の貴重な生命が北海の藻屑と消えたというショッキングなニュースを伝えて来しました。この報道を耳にした瞬間写経道場でお話した「法句経」の一句が思わず脳裡にひらめきました。

人の生を受くるは難く

やがて死ぬべき者の

今命あるは有難し

み仏の世に出づるも難く

正法を耳にするも有難し

今夏は猛暑の毎日でした。肌に感ずる易さもさることながら心の痛む事件の連続でした。秋田沖の地震により幼き十三の生命が瞬時にして日本海の荒波に消え去ったこと、山陰地方の豪雨による大被害、特に浄土三祖良忠上人誕生の地三隅町の全滅に近い惨状、更には今回の民間機撃墜の悲報等又水難、交通事故によるおびたしい死者等々を思う時「災厲不起国豊民安兵戈無用」の回向文を念じたい感一入なるものがあります。と共に、「法句経」の警句が今更ながらひしひしと胸に迫ります。

法然上人のお言葉に「人身を受くることは梵天より糸をくだして大海のそこの針の穴を通さんが如し」と申されて居ります。この世の中に生物と名のつくものはどれほどありましようか。空中、地下、海河川中に於ておそらくガンジス河の砂の数をもつてしても数えきれぬと思います。その中で幸いに私達は人間としてこの世に生を受けました。しかしこの貴重な事実に感謝の気持を起した者が果して何人居りましようか？ あるいは前世の業によって動物に鳥類に又は魚類に生を受けて居た私であつたかも知れません。

昨年まで私が住して居りました横浜三仏寺の裏は今でも相当広い畑が続いております。十数年前本堂の屋根裏に多くの鳩が巣くっておりました。農家の人々は害虫駆除のため農薬を散布することがしばしばありました。そのため朝になると本堂の軒下に二羽、三羽と鳩の死骸が横たわっているのです。幼稚園に入りたての孫がこれを見て「爺ちゃん。僕鳩でなくてよかったね。可愛そうだから塔婆を立ててやって頂戴」と云って境内の隅に鳩の墓を作り、塔婆を立て一緒にお念仏を称えたことがあります。この孫の純真な言葉に今まで忘れていたことをハッと感ぜさせられました。負うた子に教えられるとはこのことで

す。幸いにして人間として生を受けたこの尊い命も、何時どこで終末をつけるかも知れません。この自覚に立って日々の生き方を真剣に考えなければなりません。

「法句経」は次に、「やがて死ぬべき者の今命あるは有り難し」と申して居ります。やがては将来に向つての時間の経過を意味します。すでに（過去）に対する言葉でありましよう。そしてやがての時間の経過は大変幅広いものであります。今夜かも知れません。幸いにして十年、十五年先かも知れませんが、死ぬという事実は決定的なものです。「右の手のこぶしをもって左の手の手のひらを万一打ち損づることがあっても、人生れて死ぬことには誤りがない」と釈尊も云われた居ります。「法句経」は「やがて死すべき者」と申して居りますが、よく考えると私たちはあるいはすでに死せし者であつたかも知れません。

あの痛ましかつた太平洋戦争において、又各地に繰り返された天災、人災によって、あるいは重病によって死んで居たかも知れません。私ごとになりますが、私自身十数年前に死んでいたのです。それは昭和四十三年八月十三日の夕方、お盆の棚経を済ませ疲れた体を寺の玄関まで運んだ時、一人の青年が私の帰りを待ちうけて居りました。彼はかつて私が中学の教壇に立っておりました時の教え子でSと云う青年でした。国立医大を卒業し、同大病院の医局に勤務している医者でした。私の顔を見るなり「先生、大変疲れておられるようですから一度健康診断をしましょう。出来るだけ早く大学に来て下さい」としきりに薦めてくれました。「有難う。いづれその内に……」と返事して繁忙に紛れて二ヶ月ばかり経過しました。その間何回も電話がありましたので寸暇を得て十月半ばに病院の門をくぐりました。レントゲン他種々精密検査をしてもらいました。その結果胃潰瘍の様子故手術するから直ちに入院するようにとの薦めでした。あまり気がすまなかつたのです。

が、彼の熱意に動かされ、二週間ばかり経て手術してもらうことにしました。当日近親者に見守られて手術室に入る時は何とも云えぬ心境でした。これが最期になるのではなからうか？ と不安な気持でした。しかし自分は僧侶の身すべて医者に任せ、最後は阿弥陀様にお任せしようと考えた時、いくらか安らぎを得ました。——去り逝くも止まり生くも仏のみ心のまま、南無阿弥陀仏。——このような心境でした。手術も無事に終り、その後の入院生活が一ヶ月ばかり要しました。その間身内の者たちの私に対する心配り、看護は大変なものでした。特に老妻が初冬のうら寒い病室の私のベッドの脇で深夜小卓に身を寄せ、毛布をかぶり周囲に気を配りながら懐中電灯の光の下、「観音経」を写経していることが毎夜でした。恐らく私の病氣快癒の祈願からだったと思います。手術後の視力の衰えた私の瞼の奥に何粒かの露が宿っていたことを今もって記憶から去ることが出来ません。

寝もやらず観音経を写し居る

妻を身近にじっと目を閉ず

このような心境でした。後で聞かされたのですが、あの折の手術は胃癌のためのものでありました。若しS生の助言がなかったら又執刀医の適切な手術がなかったら、又老妻をはじめ身内近親者の手厚い看護の手がなかったら、今の私の命はすでに消え去っていたことと思います。これらのすべてのお力を私に与えられたみ仏の慈悲として、南無し、合掌して無事退院して今日に至りました。

お互さま、すでに亡かりし命が今ここに、やがて死ぬべき命が今ここにとする時、この

命をいとおしむと共にこの日の命をいかに生かすべきか真剣に考えたいと思います。私の好きな言葉に「日々之好日処在之道場」と云うのがありますが、名句故大方の人々はご存知のことと存じます。今は亡き芝増上寺の椎尾弁匡大僧正はこの句を極めて適切に一首のお歌として私共に示されました。

時は今所足もとそのことに
打ち込む命永久のみ命

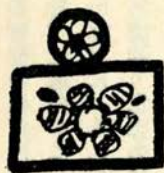
私たちはうつかりすると今日は日が悪いから、今年は歳廻りが良くないからと云って為すべきことを一日延ばし、一年送りにして居ります。元来日のもの、歳そのものに良い日悪い日、吉歳凶歳がありましようか？ あるとすればそれは我々人間の側にありましよう。日々の考え方に於て、行い方において。それ故今日と云う日、今年と云う歳を意義あるものとしたいものです。椎尾大僧正はその生き方は足もとにあると示されて居ります。即ち今居る所、今従事している仕事に全生命を打ち込めと云うことです。そしてそこが道を学ぶ場であると云うことです。学校の教室や寺院、教会に於ての聴聞の場だけが人間修養の道場ではありません。農夫はその畑仕事の中に、勤労者は会社、工場の中に、商人はその店舗の中に人間修養の現実の道場があるわけです。「法句経」は更に「み仏の世に出づるも難く、正法を耳にするも有難し」と示しております。その言葉通り私たちは幸いにして法然上人のみ教えを頂いて居ります。お念仏の光明の中に日々之好日、処在之道場でありたいと思います。

|| 法 話 ||

お十夜 — 流浪の果てに —

丹に羽わ演えん誠じょう

(大分県佐賀岡町正念寺住職)



お十夜がくると、いつも昔のことが楽しく
又なつかしく思い出されます。寺は、九州の
東端半島一漁村です。然し十日十夜、朝昼夜
と十日間おつとめしていました。

晨朝は暗い午前五時から恭敬礼拝を入れて
のおつとめ、日中法要は、法要と法話、夜も
同じです。然しお逮夜の日は、法要のあと、
子供のお話、つづいて法話、やがて、オニギ
リの御施待ぎょしたが始まり、小僧さんも何か一言お
話をしなくてはならない法要でした。

門前には店が立ち、うどん屋さんなどでは
クゾーニが今日から出来る、一つの楽しみが

ありました。

お檀家では、他宗の親族の人々を接待し、
仏前にお参りのあと、赤飯とケンチンにてご
供養がありました。

然しながら、この風習も戦争を機に、変っ
て来しました。十日十夜も七日間、五日間、三
日間と法要の日も短くなりました。

十夜の因縁を尋ねるに

時の帝は後花園

平貞国発心し

お別時せしに生まれり

十日十夜の念仏を
積まば浄土の千年に
勝る功德と諭されし
仏の教ありがたや

十夜和讃に綴られた因縁と由来は、その通りです。

法要の時、回願は、西方願王阿弥陀如来、成等正覚広大慈恩と回向いたします。

阿弥陀如来が四十八願を成就して如来になられたことをお祝いし讃える法要であります。それは浄土宗に於いては、鎌倉の光明寺、祐崇上人が、天地自然の恵みを感謝する法要はないものかと思っていた折、天皇の勅を得て、十夜法要が浄土宗に修しもよいとの許を得て修する様になりました。ほんとうに有難いことと思います。何故なれば、どの宗派でも宗祖に関する法要は、多いのですが、自己の信ずる仏の悟りを祝う法要は外にありません。従って、阿弥陀如来の十劫の昔、本願即ち四

十八願を正しく受け取ることが、いかに大切であるかと思えます。

勿論、阿弥陀如来の本願は、お念仏を申すこと以外にありません。このお念仏のありがたさは、どの様な願の中に存在するのであるか、訪ねて見る必要があるのではないかと思います。

法然上人の小消息の中に、「天に仰ぎ地に伏して悦ぶべし、このたび弥陀の本願にあらうことを」あります。

私たちは、心に反省して見る時、口称念仏を称えつつも、真に悦んでいるのであらうかと思えます。

x x x x

無量寿経に、阿弥陀如来の四十八願のことが説かれています。

昔仏が現われて五十三番目に世自在王如来が在しました。その時法蔵菩薩が如来の前に誓願を建てたいと申しました。

世自在王如来は、二百十億土の国土を見せました。法蔵菩薩は思惟の結果、四十八願を誓うのであります。

経には「設我得仏……不取正覺」の型であります。

浄土とは、衆生を救う世界であります。

即ち、過去の五十三仏の作られた、二百十億の清浄行の中から四十八願を選択したのであります。その内容を図示すれば、

仏についての願	三
浄土についての願	三
往生する方法	三
衆生についての願	
浄土内	人天 十六
声聞	一
菩薩	十
合計	二十七
浄土外	
人天	四
菩薩	八
合計	十二

この誓願について、もう少し内容を説明しますと、

(一)、浄土そのものについての願文が非常に少ないこと。

一、国土は清浄である。

二、宮殿樓閣、池、樹等一切の万物は宝

石と名香をもっている。

三、その香り十方に流れて、修道者は、その香りをうけて仏道に精進する。

(二)、浄土内及び外の衆生の誓願は、大部分にて、浄土に住む仏と衆生の対人関係、理想の僧伽の世界を説いています。

(三)、仏について。

一、私が仏になったら十方の諸仏口を極めて私をほめ讃えて下さい。

二、仏の寿命は限りなく永遠であります。

三、仏の光明は照らさないところがない。

以上、国土、衆生、仏についての願を考えます。この浄土は、仏と衆生の僧伽の世界であり、仏の衆生済度の社会であることを知ります。五十三の過去仏の願いの世界であります。

されば、浄土にどの様にすれば、往生するかについて、三つの願があります。

一九「十方の衆生、菩提心をおこし、もろもろの功德を修し、至心に発願して、わが国に生まれんと願うならば、その死に際して、必ず大衆につつまれて、その人の前に仏が現われて迎えるであらう」

二〇「十方の衆生、わが名をきき、わが国に生まれんと願うと、念いをわが国にかけ、もろもろの徳行を積んで回向するならば、必ず生まれよう」

一八「十方の衆生、至心に信樂して、わが

国に生まれんと願ひ、乃至十念するならば、必ず生まれよう。ただし、五逆罪を犯すものと、仏法を謗するものとは除く」

第十九は、菩提心を発して功德をつみ往生を願うもの、第二十は、仏のみ名を聞いて、徳行を修して回向するもの、第十八は、かかる外的条件なしにひたすら、わが心のまことをいたして生まれんと願うもの、と説明できます。

この三つの願を考えてみると、求道者の態度がうかがわれると共に、この三つを深く体験する時、すべてを捨てた、赤裸々な心こそ救済の真の姿であることを知ります。

本願は念仏にて統一されます故、王本願として十八願が存在するのであります。

以上阿弥陀如来の本願について考えました。その結果、阿弥陀如来の本願が、煩惱多き私たちの心に淨らかさを願って、すなおに念仏を称えることが、往生の第一義であることと

しみじみと教えて下さいました。

中国の善導大師は、念仏は口称であり、法然上人は、生まれつきのままにて、自然に念仏することが大切であると申します。

法然上人のご法語には、

問、一心にお念仏さえ申して居れば、この心別段に善くならずとも、又お念仏以外の修行をしなくとも、お浄土へお参りができましようか。

答、心のみだれるのは、我等凡夫の習わしであつて、この心を善くしようとすることは我等の力のとても及ばぬところであります。ただ一心にお念仏さえ申して居れば、あらゆる妄念も、おもき罪とがもやがては消え失せて、お浄土へ生れさしていただけるのであります。

と説かれています。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願って、大人たちからのすばらしいプレゼントにご利用下さい。

大 道 社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

電話〇三(二六二)五九四四 東京一―八二四七

話

法

お十夜法要によせて

小滝隆定

(三重県美杉村観音寺住職)



秋も深まり、収穫が終りに近づいて、漁業も切り換え時を迎える頃になると、全国各地の浄土宗の寺々では、十夜法要がとりま

す。

木枕を借りてお寺で十夜かなという句があるように、昔は寺で、善男善女が寝泊りして浄斎^{おとぎ}の材料等を持ち寄り、おつとめの合間には、四方山話^{よも}に花を咲かせる等と和み合いながら十日十夜つとめたのでありましよう。夜食として銘々皿にもられて出された、赤飯や、味噌飯をいただくのが楽しかつ

た小僧時代が思い出されて懐しいわけです。

お十夜は今更申すまでもなく、仏恩報謝の法要で、「十」は満数であり、ものが満ちていることを願います、心いっぱい、満腔の誠心で阿弥陀如来の広大慈恩を報謝し、併せて祖先の恩徳に感謝の真心を捧げる念仏報恩行であります。

○真如堂について

十夜法要の発祥は大方周知のとおり、京都東山の真如堂（真正極樂寺）であります。真如

堂開山物語(小林月史著)によれば、今から九九一年前、東三条院(藤原詮子、道長姉)は、當時戒律堅固の名声高かった、戒算上人と協力して、水清く、風光明媚な極楽にふさわしい、洛東、神樂岡の東、白川の畔に堂宇を建立し、比叡山の常行三昧堂から円仁上人(慈覺大師)御作の靈驗あらたかな阿弥陀像を本尊として迎え開いたとあります。東三条院は、十七歳の時、天元三年(九七八)八月円融天皇の奥御殿に入られ、二十歳で一条天皇をご誕生、七歳で即位、東三条院即ち藤原詮子の父たる兼家が関白となり、政治をとっていたが、正暦三年(九九〇)父兼家が他界、その翌年二月に円融法皇が崩御なさる等、身近な人々の無常に会った結果、同年九月に詮子は落飾されて尼となり、深く仏門に入って、東三条院と号され史上最初の女院号をもたれたのであります。このように、女院が深く仏門に入られたと同時に実力があつたればこそ、真如堂が創建されたのでありましょう。

その後真如堂は、日本浄土教の聖地として、またその道場として、永く庶民の信仰を集めていましたが、応仁二年(一四六八)の兵火にかかり、その後約三十年、一時は復興しましたが、度重なる戦火で焼亡したのであり、今から約二百八十年前、元禄時代に現地に復興したのであります。

○法然上人と真如堂

真如堂縁起によると、法然上人は、ご自分の悟を開かれるための道場として、度々この真如堂におこもりになり、上人に従って多くのお弟子や信者達がお参りした。だから真如堂の近くに、沢山の念仏道場ができ、そのような、道場や草庵がもとになって、後世において、安楽寺ができ、法然院、岡崎御坊、金戒光明寺ができたわけだといわれています。法然上人が、直々に、この真如堂の御本尊から、たまわったという、お歌が残っています。今でもこの真如堂のあったところにでき

た、元真如町では、人が亡くなると、そのお通夜に、西国三十三ヶ所の観音の御詠歌がとなえられるが、それがすむと、番外として、多くの御詠歌が唱えられ、その一番最初に、法然上人が真如堂の阿弥陀さまから、たまわったという御詠歌、

ただたのめよろずの罪は深くとも

わが本願のあらん限りは

が、となえられるそうです。浄土教は当然のことですが、阿弥陀仏の本願を離れて宗教として存在し得ないものが、本願であり、その本願をたたえているお歌であります。法然上人と、真如堂は深いご因縁があったといえます。

○お十夜の由来

私は数年前、真如堂参詣の砌、ある方の紹介で、真如堂について、お詳しい、仏教史家

小林月史先生（今年二月ご逝去）をお訪ねして、お十夜の由来等について教わりました。

今から約五六十年前、後花園天皇の御代、將軍足利義教の執権職伊勢守平貞経の舎弟貞国は、名門に生を受けながら、齡三十歳になろうというのに、何の役職にもつけず、聊か厭世気味でありましたが、ついに出家を決意し、真如堂に参籠して、御本尊の阿弥陀如来前で、真心こめて、三日三夜の不断念仏を修しました。ところがその満願の日の明け方、夢の中に、高貴な姿の僧が現れ、「お念仏を称える御利益は廣大無辺である。未来極樂往生は疑いないが、現世に於てもまた御利益を蒙ることがあり、近い将来きつと、幸せが訪れるであろう。出家のことは、しばらく思い止るように」とのお告げがありまして、「心に立てし誓いにかないなば、世のいとなみはとにもかくにも」と、一つの歌をしめされました。貞国はありがたい夢のお告げと拝礼して家に帰りますと、果せるかな、その翌日

將軍家から使者があり、「直ちに幕府の執權職につくように」との沙汰がありました。當時、幕府は北朝を擁立している持明院統を推戴しているのに、幕府の執權職である貞国の兄貞経が、南朝派の大覚寺統に荷担したため、蟄居を命ぜられたからであります。

執權職を拝命した、貞国は嬉しさのあまり「実は真如堂の阿弥陀様から……」と將軍に告白しました。そのことが後花園天皇の歡聞に達し、「それはまた、ありがたい、結構な話である。更に七日七夜のお念仏を続けるように」との御思召が下りました。前の三日三夜に合せると丁度十日十夜となり、それがまた、無量寿経の下巻に説かれています。「十日十夜」に合致するので、爾來、この真如堂で毎年十日十夜の法要をつとめることになったのであります。

最後の日を十月十五日と決めたのは平貞国の靈夢を感じた日でもあり、十五日は阿弥陀如来の成道の日だということに基因してい

るのであります。

真如堂では、十夜法要には、円仁上人が中国(唐)で十年学び、善導大師の後身であると言われた法照禪師が始めた五会念仏(音曲念仏)を習い、叡山に伝えたという、所謂引声念仏を称えるのが例となっています。

その後六十年、明応四年にわが浄土宗鎌倉の光明寺第八代の観誓祐崇上人が、後土御門天皇の御信任厚く、宮中に召されて、浄土の要義を御進講になり、大変おほめに預りました。恩賞として「何か希望はないか」との天皇のお言葉に「それでは真如堂の十夜法要を私の鎌倉の光明寺でもつとめさせて頂き、多くの人々にお念仏の御利益を蒙らせ下さい」と言上し、直ちにお許しを得て以来、広く浄土宗の寺々でつとめるようになりました。

○お十夜のころ

さて、無量寿経を拝読いたしますと、经文には、「此に於て善を修すること十日十夜す

れば他方諸仏の国土に於て善を修すること千歳するに勝れたり。所以はいかん、他方仏國は善を為す者多く、惡を為す者は少し、福德自然にして造罪なき地なり。唯だ此の間のみ惡多くして自然なること有ること無し」とあります。

諸仏の世界は、自然に善を修することが出来るようにそなわっていて、惡を造る縁の少ない所であるが、吾々の是の世界では、惡が多く、少しの善を行うにも大変努力を要します。だから、この惡因縁に包まれた、この世の少しの善事はまことに尊いのであります。この善とは、「南無阿弥陀仏」とお念仏を申すことであります。

お念仏には万徳無漏の功德があり、私達凡夫もその功德によってお浄土へ往生させていただくことができます。仏恩報謝に併せ、祖先の恩徳に感謝の真心をこめて、この世での善の最たるお念仏を申すことがお十夜のところであります。

|| 好評増刷 ||

小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者、故小布施弘学師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。すでに四版を重ねて、好評増刷中。

B 6判 二三〇頁 価一五〇〇円

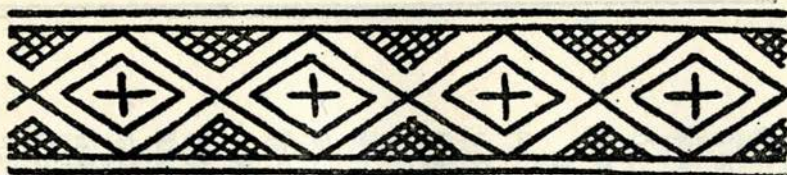
(十二五〇円)

(申し込み先)

〒 381-12 長野市松代町東寺尾三八八-1

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二



(一) (口) (法) (話)

臨終の来迎を願う念仏

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

古書の一つである念仏鏡の中で、念仏を唱える声は赤子の泣き声に似ていると説いている。赤子は歩けるわけでないし口もきけないのであるから、何かして欲しいと思えば、声をかぎりに泣いて訴えるしか方法がないわけである。母親は赤子の泣き声を聞けば急いで馳けより、もし空腹なのであらうと察すれば直ちに乳を与えるであらうし、もし寒さを訴えているのであらうと思えば抱いて暖めてやることであらう。こうして赤子は飢えをみたすことができるし、あるいは寒さを防ぐことができるが、それというのもすべて母親の判断と温かな仕草のおかげである。赤子のできることといえば、ただ泣き叫んで母親に訴えることだけである。われ等ごとき凡夫も赤子と同じことであって、知恵は愚かであって難しい修行にとつてい耐えられないのである。われ等にとつてできることといえは、仏助け給えを願って心から念仏を唱えることしかないのである。念仏さえ唱えていれば仏の光明に沐して助けを戴くことができる。もしわれ等が貪欲のために苦しんでいる時であれば、仏は清浄光を放つてわれ等を救い給い、無貪善根の身となることができる。もし怒りのために自らの身を焼いている時であれば、仏

は歡善光を放つてわれ等を救い給い、忍辱の人と同じようになれる。

法然上人はいつもご自分のことを「黑白を知らざる童子の如く、是非も知らざる無智の者也。ただ念仏往生を仰いで信ず」と仰せられていた。しかし上人がいかように仰せられたとしても、聞く者は上人が本当に童子のように何も知らないと思う者はいなかったに相異なる。それなのにこのように仰せられていたのは、念仏を唱えるには赤子が母親に訴えて泣き叫ぶように、あるいは童子のような無心さにかえって唱えるのであると教えていたのであらうと思う。

善導大師は日中礼讃偈の中で「仏や菩薩たちは念仏の声をたよりにして来迎し給う」と説いている。これは下品下生の者について述べた一句である。十悪五逆を犯しても後悔しなかった者が臨終を迎えて苦悶し、目の前に猛火を吹き上げながら開いている地獄の入口を眺めて戦っている、善友の勧めでようやく十念を唱えることができた。仏はその声をたよりにして来迎し給うたのである。法然上人は大胡太郎実秀へつかわす御返事の中で、次のように仰せられている。

「まめやかに往生の心ざしありて、弥陀の本願をうたがはずして念仏を申さん人は、臨終のわるき事は大方は候まじき也。そのゆへは仏の来迎し給ふ事は、もとより行者の臨終正念のために候也。それを意えぬ人はみなわが臨終正念にて念仏申たらむ時に仏はむかへ給ふべき也とのみ意えて候は、仏の願をも信ぜず、経の文をも意えぬ人にて候也」

われ等が臨終に際して正念にもどることができて念仏を唱えるから来迎を蒙るのではなくて、来迎を蒙ることによって初めて正念にもどれるのであると仰せられているのである。仏は拳身の光明を放ちながら来迎し給うのであるから、行者はまず初めに仏の光明に沐して臨終に際しての執着も苦悶も消滅することができて、次いで仏の御姿を拝することができるのである。念仏往生の本願を信ずると同時に、それにも増して来迎引接の本願に頼みをかけずにはいられない。われ等凡夫が臨終を迎えて大きな苦悶にあったにしても止むを得ないことである。それはそれとして仏の来迎を蒙って正念にもどれるようにと願ひ、仏に聞いて頂けるようにと赤子と同じような無心になって、真心から念仏を唱えていたいものである。

(す)
(い)
(そ)
(う)

京都岡崎・吉田界限 (一)



ふる里は遠きにありて思うもの、とは室生犀生の言葉であるが、京生れの京育ち、そして今も尚京に住んで、恐らくこのまま終焉の日を迎えるであろう私にとって、ふる里とは遠きにありて思う存在どころでなく、日々思うともなく思いながら、その中に生きつつある極めて近い存在なのである。

戸と川がわ霊れい俊しゅん

京生れの京育ち——更に厳密に言うなら——京も昔流に言って洛中洛外のその洛外の鴨川の東なる岡崎が私の愛着するふる里なのである。

鴨涯の、東三本木の書斎「山紫水明処」から東山連峯を眺めて、北は比叡山から南は稲荷山のあたりまで三十六峯——峯々には一々彼の名づけた峯の名

がある——のその中でも、駱陀の背のように倚りに添うように突出した双つの峯、東山の連脈を背景に二つの三重塔の塔影の美しいその景色を、頼山陽はこよなく愛したという。

双つの峯とは、栗原ヶ岡と神楽ヶ岡とである。

岡が御崎のように出ているから岡崎とも、岡のさきにあるから岡さきが岡崎とも呼ばれて、今の地名を生んだものか。

いつ頃から岡崎という地名に定まったのであろうか。ひとときは、後醍醐帝の営まれた宝幢寺の名にちなんで、宝幢寺村と呼ばれる時代もあったと、ある書は伝えている。帝が巨勢金岡に描かせた地獄の交相絵図が、真に迫った描写で、地獄の獄卒に攻めさいなまれる罪囚の鬼哭啾々の悲鳴に、宮中の官女達が恐れおののき、その為に宝幢寺に納められたという。

やがて、時遷り宝幢寺は廃寺となり、その巨勢金岡の描いた地獄交相の絵図は、近江の下坂本の来迎寺に移されることとなる。

現今の岡崎の氏神牛頭天王を祀る岡崎神社は、も

とは宝幢寺の鎮守であった。

法然上人が比叡を下りて、それは、八瀬道であるか、雲母坂であるか、それとも山中峠道であるかは何れかとして、今の白川通りの驛道を迎って、先づ立寄ったのが、真如堂の三国伝来の阿弥陀如来であった。

そして、都に一步を印すべく、白川禅房のほとり栗原ヶ岡の頂きに立って、真向いの華頂山——將軍塚のあたりを一望の下に見やった時、彼の胸に湧く感懐はどうであったであらうか。

そのあたりは、今は岡崎公園と名づけられて平安神宮をはじめ京都美術館、京都美術館、京都近代美術館、京都動物園等、京都のあらゆる文化施設の集まる場所であるが、平安末期から源平争乱の時代にかけて、あのあたり一帯は、歴代の天皇発願によって建立された六勝寺の寺々がはかなくも伽藍を誇った史跡である。

今もその寺名が、そのまま町名として残る法勝寺、円勝寺、尊勝寺、成勝寺、最勝寺、延勝寺という「勝」のつく所謂六勝寺の壮大な伽藍が東山を背

景に堂塔伽藍の美を競うた偉容は、さながら此の世ながらの浄土の感があつたであらう。

浄妙寺関白

きみが代に法のすくるるしるしかな

ひかりさしそふ西の月かけ

うつし世を、経文にある極楽の世界そのままになぞらえて、昼夜の別なき宝楼閣の数百口の僧尼の梵唄の声、極楽の八功德水の宝池さながらの大池には竜頭鵝首の舫の上には綾羅錦繡天女に給う美姫たちの歌舞讃嘆の麗姿——争乱に明け暮れ「主上臣下」ともに一門一族同朋の相克、時に襲いくる地震、飢饉のような自然の反乱、そして一瞬の命の栄華榮耀のはかなさを弥陀にすがり、極楽浄土に救われようとの世紀末的絶望に喘ぐ平安末期の殊に宮廷人の空しい願いが形として現れたのが六勝寺の姿ではなからうか。

救いなき澁末の仏教、たのみなきものにたのみをかけて、永遠を祈ろうとする末法の造寺造塔の堅固

の願い、そのままの象徴が六つの寺々のあり様でなからうか。

今、わずかに、その面影は宇治平等院の鳳凰堂に求められるという。

見た目には美しくも、素晴らしいものであったであらう。しかし、結局、形あるもののはかなさに過ぎない。極楽になぞらえた姿は、ただ一瞬の官能の美の訴へに他ならない。

六勝寺は、すべて七十年乃至九十年のいの中で、戦火により、或いは落雷によって崩壊してしまった。古い歴史の数々の書が、ことこまかに六勝寺のありし姿を今に伝えているが、それは、まさに諸行無常を、諸法無我を、ただ辛うじて説いてくれるにすぎない。

法然上人が、比叡を下りて眼のあたりにした頃は六勝寺は、すべて廃墟となり焦土と化した空しい幻にすぎなかったであらう。畳々たる焼け材に、礎石に、ありし目のこの世ながら極楽浄土の美の一かけられも見出されなかったであらう。

法も濁り、時も濁り、人も濁った末法仏法の現実

におののいたであらう。そして人の営みの空しさを感じた法然上人には、真実なるものとは何か、永遠なるものとは何か、真の仏法とは何か、ひしと感じとられたにちがいない。

六勝寺の廃墟をあとに、法然上人は、形の殿堂でなしに、魂の殿堂の尊さを思い、信の一念に徹したその歩みと華頂山の麓、真葛原のあたりへ辿ったのだと思う。

少年の日から、岡崎公園は、私たちの恰好の遊び場所であった。小学校の運動会は、狭い校庭を去って、桜馬場と呼ばれる今の京都会馆のあるあたりで行われた。歴史好きの小学校の先生に教えられて、「昔の古いお寺のあとを探してみろ」と言われて幾くつもの瓦を拾い集めたものである。

公園の京都動物園の庭に少し小高いところがあった。塔の壇と呼ばれて、丘の上には東屋が設けられていた。それは法勝寺の八角九重の塔の基壇であった。東山を背景にして雲表に聳えた八角九重の塔は、さぞ在りし日のその姿は見事なものであったらう。この塔の壇に少し土をいじくると礎石のかけら

や古瓦がころころと見出された大正中期の少年の日が、いたくなつかまれるのである。しかし、その法勝寺の最も有力な史跡が、残念にも戦後岡崎に進駐してきた米軍によって、軍自動車プールに邪魔なものとして地ならしされて、今は跡かたもなく失せてしまった。公園の運動場の中にあつた皇女皇妃の墓か、或いはその下に経巻の秘められた場所かとの法勝寺に関係のありそうな伝説の姫塚、鶴塚も、その小松と芝生に囲まれた品のよい姿を、ブルドーザーで消されてしまった。

法勝寺の執行俊寛の物見の松と伝えられる老松が、法勝寺の跡に創建された日蓮宗満願寺の破の築地の上から若王子へ行く道の上に、繁茂した枝ぶりをみせて、保元・平治の昔を偲ばせてくれていたが、その口碑とともに姿を消してしまつて幾年にならうか。

平安神宮神苑の蒼竜、白虎の二つの池は恐らく六勝寺の何れかの寺の竜頭鶴首の舳をもやつた宝池の名残りであらう。大きな池の入江であつた辺りというので、平安神宮を含むそのあたりを岡崎入江町と

言う。

池の泉は今尚滾々として尽きない。夏は暑さ厳しい京都であるが、神戸から移り住んだ人の話に、一夏中この入江町の住居には扇風機も要らない涼しさであるという。

大内裏から賀茂川を渡って鴨東へ、そしてうつ蒼たる聖護院の森を通り抜けた天皇の行列は六勝寺に参詣するなり、法勝寺のあたりの白河殿離宮に入るにしても、一まづ小休止して足の疲れを医やし、牛車の隊列を正しく整えて目的に向う。綺麗びやかに整えられた行列の通る道は、わずかに二、三米にすぎないけれども、今の黒谷前の通りから動物園の前までだけが広く、文字通り岡崎広道と呼ばれるその通りなのである。

白河院の離宮の趾というのは、いままも南御所町・北御所町で呼ばれる住宅街である。

六勝寺の亡び去った後は、再び成らず。廃墟は、おもむろに田夫野人の耕田となって明治の世に及んでいった。

しかし、往昔の歴史ある六勝寺の址の地を、いと

ほしみ求めたのであろう。文人墨客が競うて、彼らの書屋を営み、また大名や洛中浪花の富豪たちが別墅に求めたのは近世の岡崎であった。彼らの残した贅を尽した庭園の数々が、今も尚、世塵を逃れて、町のそここの奥にひっそりと残されてある。

これらの庭のために、この岡崎は洛西の鳴滝あたりとともに古くから造園植木の職業者が多い。庭とともに彼らの業が生れ栄えてきたのであろう。

私は毎日、時をきめないで、このふる里岡崎を散歩することの多いこの頃である。

六勝寺の址に立つ市観光局の説明に、思い出を深めるとともに、通りの小路の奥にいまも残る村瀬栲亭の邸址、香川果樹の小庵のあと、蒲生君平の、小沢芦庵の、中島綜蔭の、岡崎の里を何十回となく転居した太田垣蓮月の住居のあとを、或いはまた若き日の神官富岡鉄斎の仮寓のあとを思いつ考えつ迎るのである。

(つづく)

特

別

寄

稿

念仏とイエススのみ名の祈り



ボール・リーチ

(上智大学名誉教授)

○

今年の春、東京の国立博物館で画期的な「空海と密教美術展」が開かれたとき、曼荼羅の室では大勢の観集の流れは、さして滞ることなく通り過ぎてし

まった。とりわけ感動を誘う清盛の脳の血で描いたと伝えられる通称「血曼荼羅」の前で何人の人が立ち止まったろう。たとえ学僧といえども、あの目を見張らせる迷宮の中に足を踏み入れただらうか。曼荼羅とは、宗教的な人間が真実の生活の中で従うべき精神的な道程を示す地図のようなものである。人

はそこで迷路に踏み迷うことなく一步一步頑張らなければいけない。とはいえ、これを理想として、この道を歩む人は非常に少いのである。

この曼荼羅を見て、ヨーロッパのキリスト教信者なら、おそらく十字架の聖ヨハネの著作『カルメル山登攀』に挿みこまれている地図を想い起こすであろう。この地図には、神秘家が「精神的結婚」と呼ぶ神との完全な一致に至るまでに出逢うさまざまな障害を、いかにして乗り越えて進むかが教示されている。

ところでこの精神的結婚という言葉は、かつてパリの美女たちのサロンからサロンを席捲したスキュデリの小説『ラストレ』の抄約が、私の若いころのフランス文学の教科書に載っていたものを思い出させた。これは文学的には全く価値のない小説だが、面白いことに、これにも同じように「愛の国の地図」が描かれているのだ。この地図は、私たち男と女を純粹で完全な人間の愛へ導く道を教えている。ただしフランスでは、文学の専門家の大学教授たちの間でも、これを現実の生活で従うものとして取上

げている人はいないが……。

しかし、私はこういう方法を別に非難はしない。真の靈的生活を送るためには、これも一つの方法だと考えるからだ。私たちを超え、包む一つの見えない世界へ導くために、絵画や音楽を役立てるのもよいではないか。恵まれた人の中には、直観にせよ、光明にせよ、また道理や、否定の否定を通り越して、長い廻り道の末に、遂に悟りが開かれるということもありうるからだ。

それでも宗教的な直観は、ベルグソンのいう「長い反省の習慣の果実」ではない。それは私たちの人間的な努力の結果ではなくて、浄土宗の信徒が「南無阿弥陀仏」と唱えて、キリスト教の信者が神と呼ぶところのこの絶対の他者によって、賜物として与えられるものだ。したがって阿弥陀如来を念ずる念仏者にとっても、キリスト信者が恩寵、すなわち無償の恵みと呼ぶものも、単なる人の努力によって得られるものではない。



さて、浄土宗におけるご来迎というよく知られたシーンは、私にはこれも一つの曼荼羅と思える。しかもどんな曼荼羅よりも分かりやすく、最後に人間の到達するもつともすぐれた恩恵の証しと同じものなのである。すなわち浄土に迎えられるという喜びを、信徒の心から湧き出させるところのもの、自分を迎えにきて下さる阿弥陀如来を、自分の側からも迎えする叫び、よくいらっしやいました、はい喜んで参ります」という叫び、これこそ、「南無阿弥陀仏」の名号を唱える真の意味でなくて、なんであらう。

私は日本で、何世紀もの間、この念仏の功德が、数多い討論と思弁の対象になったことをよく承知している。それにもかかわらず、律宗、天台、真言、禅、日蓮といったあらゆる宗派の中で、浄土宗はつねに熱心な信徒を惹きつけてきた。ここで、この簡素な形式に立つこの宗派の理論を述べるのは私の役

柄ではない。ただ、私は日本における宗教思想の特色のある探求を考え、続けるようにここで諸賢の注意をうながしたいだけだ。

ますます一つになりつつあるこの世界で、私たちは互いに共通性の場を求めずして、相反するようなもの、つまり喧嘩の種になるようなものばかり探しているといった誤りを犯してはいないであらうか。最近では、海外旅行が盛んになり、仕事のため、あるいは勉強のため、はたまた純粹の觀光お楽しみ旅行で、さまざまな宗教、宗派の信者たちの出逢う機会が増えている。そのような社会的な交換の場で、こういう人たちが宗教的な問題にまで行きつく機会がどれほどあるかを、私は強く疑っている。なんと、彼らは考えているのだ！ あなたはフランス人かスペイン人、だからカトリックだ。そしてあなたは日本人だから仏教徒だ、と。

フランス人なら誰でもカトリックなら、さぞかし神さまもお喜びだろうし、日本人なら誰もが仏教徒なら、これもまた仏さまを喜ばせるにちがいない。そして、もしこういうふうだったら、人は人間とし

でもっともつとよく理解しあえるであらう。なぜなら、その名こそ違え、阿弥陀如来とイエスス各々の宗教は、真底、人間に同じ生活の理想を實行するよう教えているからである。

お念仏を唱えながら、浄土宗の人たちは、次のような信心の精髓を告白しているのだ。

彼において人なる自己はもはやなく

心は阿弥陀の心になり

行いは阿弥陀の行いになり

言葉は阿弥陀の言葉になり

生命は阿弥陀の生命となる

(時宗全書)

聖パウロの言葉を繰り返すキリスト信者も、これと異ならない。

もはや私が生きるのではなく、私のうちにキリストが生き給う

〔ガラテア人への書簡〕二一二〇)

そして、「南無阿弥陀仏」の六字の名号を唱える念仏と同じように、キリスト教にも「イエススの名への祈り」と呼ばれる祈りがあるわけである。キリスト教には、「天に在しますわれらの父よ」に始まるキリスト自身が教えられた主禱文、また「めでたし、聖寵満ちみてるマリヤ」で知られる聖母への天使祝詞というどちらも「新約聖書」に記されている二つの主要な祈りがある。二つとも簡潔でありながら信心の精髓が述べられていて、信者が朝夕唱えるものであり、また必ず祭儀の折にも欠かせない大事な祈りである。

ところが、ビザンティン東方教会では古くから、「イエススの祈り」といって、救い主のみ名そのものにすべての祈願を集中してきた。この祈願はイエススという主のみ名を単独に繰り返すか、多少ともそれに個人的な表現をつけ加えるかされた。もともとイエススとは、ヘブライ語で「救い主」の意である。新約聖書には、「イエススのみ名によって」という言葉が各所に見出される。イエススご自身「今

まであなたたちは私の名によってなに一つ求めたことはなかった……あなたが私の名で父に求めるものは何でも、父は与えてくださる」(ヨハネ二六—二四)と言われている。

この「イエススの祈り」はキリスト教の歴史の中で静寂主義の母体となり、さまざまな行と組み合わされ——例えば屈身礼拝のような——北はロシア教会へ、南はアフリカの砂漠地帯の修道僧へと敷衍された。今日では、カトリックも英国国教会も、またプロテスタントにもこの祈りをする人が増えている。それは「イエススのみ名の祈り」と称され、大體次のように唱えられるものである。

主イエス・キリスト、神の子、われをあわれみ給え

これをラテン語で唱えるなら、もっとリズムリカルで、語呂がよくなるだろう。

JE-SU-FILII-DEI

MI-SE-RÉRE-MÉI

イエズ・フィリデー
ミゼーレレーメイ

われわれキリスト教信者が、「イエス」と叫ぶことは、とりもなおさず、「主イエスよ、来て下さい」(黙示録二二・二〇)という叫びを繰り返すことなのである。

阿弥陀如来の衆生済度の本願を信じていられる仏教徒が、とくに浄土宗の信徒方が、「南無阿弥陀仏」と唱えられるのも、人間の救いという点では、方法こそ違え、全く同じものだと思には考えられる。

聖パウロも言われた、「絶えず祈りなさい」と。同様に法然上人のおことばのとおり、念仏の声の絶えることはないであらう。

——大船教会にて



お十夜風物誌(上)

— 勝ち鬨念仏の寺 —

柴 しば
田 た
六五郎 むつごろう

東海道本線下り列車が、右手に伊吹山を仰ぐ関ヶ原の古戦場を過ぎ、米原辺りにさしかかると、湖岸の松並木越しにきららかな琵琶の湖面が視界に入ってくる。その白い湖面が更に窓辺に近く、澄んだ水の色さえ見えようかと思う頃、列車はトンネルとは名ばかりの短いトンネルをくぐって、鄙びた小駅に止まる。安土である。安土、桃山の話は私達に絢爛たる文化の代名詞として印象されるが、それとは全く裏腹に、いわゆる文化なるものに置いてきぼりを喰ったような表情の、駅とその周辺のたたずまいである。

ホームに降り立って振り向けば、左後方には、盆地に

しては大きな山容の観音寺山が聳え、その稜線がゆるやかに窪んで北西の安土山に連なる。その窪みが今潜り抜けたトンネルであるが、此の観音寺山こそ、永禄十一年(二五六八)信長に陥される迄、およそ四〇〇年間佐々木一族の本拠であった観音寺山城の址であり、今は、落城後山麓から山上に移したと伝えられる西国三十三番札所の観音正寺が在る。反対に安土山(総見寺山)の方は標高も半分にも及ばぬ低い山であるが、信長の築いたという七層の天主の幻影と共に七年に充たぬ天下布武の夢の跡が險の裏に揺曳して去り難い想いである。

さて、駅を出て左に路をとる。不規則な家並みには歴

史の重みを感じる程のものもなく、下駄屋、理髪店、呉服雜貨屋、荒物屋、仕出し屋等、庶民生活に深いかかわりを持つ店だけが、一般の住居と田圃との間に、欠けた櫛の齒のように断続している。此の辺りの街並みは恐らく鉄道の敷かれた明治以後のものなのであらう。並行する左手の線路との間隔は五〇米もあるのだろうか。両側の田圃より三米ばかり土手を盛り上げて敷設された鉄路を藁進する列車を見上げなどしながら駅から四〇〇米程も来たあたり、道の左手三叉路の角に建つ安土淨敝院と五字を大書した石柱に出逢う。あの童話作家巖谷小波の父一六居士の書である。これを左折して数十歩を踏めば遮断機もない無人踏切であるが、此処に立った途端風景は一変する。今まで線路越しに見えかくれていた森の梢と本堂の薨が、堂々としたその全容を現わす。淨敝院である。

道の真正面一〇〇米足らずの処に北門。その後方一直線上に鐘樓の美しい屋根の流れが重なる。鐘樓の右に十一間四面の本堂の大屋根が聳えた姿は、正に末寺五十九ヶ寺を擁する本山たるにふさわしいが、更に境内に足をふみ入れると右手に観音堂と春陽院の本堂・庫裡、本堂

裏から庫裡へ続く渡殿、書院、勅使門。左手に廻れば鐘樓に続く茶所、釈迦堂、不動堂と、それぞれ独立の諸堂が本堂を巡る参道の外側に点在する。南面する本堂の前方に開かれた仁王門は朱塗の樓門であり、両袖に練堀と門番小舎を控えた実に堂々たる建築で、山門とは云うものの有事に備えた信長の配慮の痕が窺える。しかし此の門に通ずる道は至って貧弱な一筋の田道にすぎず、その異和感が人を戸惑わせる。

敷地七〇〇坪、周囲の山林部分を除けば五〇〇坪余りであらうか？ 此の広い境内地に繰り広げられる淨敝院の秋法要、即ちお十夜法要是開山隆堯法印忌を併せて毎年秋漸く深まる十月三日から十日間営まれる。三方を開け放った本堂であるが、秋の白い光もこの丈六弥陀像の膝元までは届かず、百匁ローソクのゆらめきの中に、三百数十年の世の営みを具さに眺めてきた愛の眼差しが半眼に開かれて、出仕の僧と堂に溢れる信者の群にそそがれる。午後二時に始められた日中法要の間、中も役僧の一人と世話人は、一尺ばかりの経木塔婆と筆、墨壺、錢函を持って参詣人の間を廻る。

志納回向を募る為である。膝を入れる余地もない程に

詰めあった人々の足を踏んだり、蹴躓^{けつち}いて人の肩に倒れかかったりの難行であるが、そのたびに小さなさざめきが周囲に起る。若しその辺りに若い娘でも居ようものならひとときわ高い喚声があがる。色彩に乏しい筈の参詣人の間に、意外にも点々と華やいだ空気が見られるのは、此の場所が見合いの場でもあるせいなのだ。人目も草も繁き田舎には、若い者達の出合いの場は無い。一年に一度の此の寺の秋法要こそ願っても無い機会なのだ。その思いは、親たちにとっても変らない。仲人の口ききで娘を連れて来た母親にとっては法要や説教なんぞ上の空である。我が事のように懸命に相手方の姿をもとめて鶴のように首を伸ばしてキョロついていた母親が、役僧に足を踏まれてハッと我に返り、思わずナマダナマダと念仏称えつつ志納のなにがしを差し出す所作のおかしさに娘がブツと吹き出す。こちらはまるで他人事である。

内陣一杯、二十五、六名はいたであらうと出仕の僧が退堂して行った後に唯一人残った中年の僧は、下陣に向った高座に登って、伏せ鐘を打ちつつ回向を上げ始めた。淡いがよく通る声で、唯その声を聴くだけで心の澄む思いである。恐らく天稟の美声に加えた修練が作り上

げた芸術品であらう。ずんぐり丸い僧の、姿に似ぬ回向文の名調子に酔う人々である。回向文が終れば交替に高座に登った僧が説教を始める。こうして日中、初夜と二席の法座は毎日くり返されるが五日、九日、十一日と三回の通夜も毛布を持参の善男善女で堂は一杯になる。本堂の左前方、釈迦堂前の広場は、差配の武井政治郎の指図をまつまでもなく毎年サーカスのテントが張られる。

空中ブランコ、曲馬、一輪車、綱渡り、玉乗り、猿・象・犬の曲芸、ライオンの火輪くぐり。箱に入った人間の切断は、トリックと判っているながらお客をハラハラさせ、大きな鉄製球儀の中を縦横に疾駆するオートバイ乗りの姿と、エンジンの物凄い爆発音は、男の子の心を完全に魅了してしまった。サーカスの伴奏者は又同時に客寄せの笛吹きでもあった。開演間近や、呼び物のショーが始まる前には、トランペットもクラリネットも大空に向って吹き上げんばかりの姿勢と力で吹きまくり、太鼓もシンバルも力の限り叩きつける天然の美の、メロデューとも言えぬ咆哮が、一瞬説教師の口を閉じさせたりもしたが、大人も子供も先を争って木戸口に殺到した。サーカスと山門の間にテントを張るのは見世物小舎。小

人の腹芸、アクロバット、蛇使い、蛇娘、これもインチキと解っているロクロ首の娘、大夫姿等ETC。見世物小舎は、サーカスが殆ど健康な、或いは人並以上に鍛えられた人々に依つて演ぜられるに反し、多くの場合、不具者や奇形児を食い物にする、あこぎなやり方に対する反感と、それ相応の雰囲気の陰湿さの為か、余り人氣の無い小舎である。此の小舎と向い合つた墓地の塀に幕を張るのは、のぞきカラクリ。ガラスをはめた覗き窓が半円形に並び、上方に張られる幕には、「ほととぎす」であれば海軍の軍服姿の武夫と別れを悲しむ浪子の二人。「地獄極楽」であればお馴染みの六道絵。けれども馴染みとは言ふものの、此の絵は何時何処で見ても恐ろしい。この恐しさは何処から来るのか？ 私の場合此の恐しさ、怖さは、絵の可否や構図とは関係が無い。自身に内在する怖さに対面する怖さであり、これに呼びかけられる恐しさである。而もこのコールサインは常住不斷止む時が無いのであるが、のぞきカラクリの幕の稚拙な絵も、寺の本堂に掲げられる六道絵も、共に私の胸内のあのコールサインをいやが上にも増幅して止まない。「石童丸」「まま子苛め」等の外題にかかる時もある。こう

なると、竹で調子を取りながら、独得の鄙びた節廻して語るこののぞきも、一種の仏教芸能と言えるかも知れない。

日に増しふえる参詣人は、地元の安土近辺は云うに及ばず、金田、武佐を老蘇おいそを併せた十四ヶ寺、八幡辺の九ヶ寺、八日市方面の十ヶ寺、上之郡と云われる日野方面にかけての十ヶ寺、野州から栗太郡方面の十六ヶ寺、都合五十九ヶ寺の住職と檀信徒が、年に一度の大祭と言うべきこの秋の大法要に参集するのである。西の方金勝かたこんざあたりからは六里もあろうか？ 遠い道を遙々と歩みを運ぶ者の多くは通夜の日を選んだが、列車を利用する者もあった。八幡、愛知川を運行するバスは大増発で、客が一杯になり次第発車する車は、蟻の行列よろしく、蛸々と朝鮮人街道を急ぐ人々に土煙りを浴せながら突っ走っては、前記石柱の前で乗客を吐き出したのだが、此処は又、村の青年団の仮設した自転車や乳母車の預り所でもある。境内一杯の人波の中に、こんなものは持ちこめないのだ。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一—二—六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八—八—二—八七

読者からの感想とメッセージ

「すばらしい子供の

育成をめざして」への感想

若^{わか}松^{まつ}照^{てる}雄^お

(柳井市在住)

『浄土』七月号、桑原法道氏の標題のご一文に感想を差し上げます。

文中、東京の校長さんの提言、「これが私の娘です。これが私の息子です」と胸を張って言える子供を学校におくるべきだと思います」と。まさに感動的には違いありません。その通りだと思います。只その前に、いささか鶏と卵の論法になりますが、「これが私の父です。これが私の母です」と子供が胸を張る親でありたいと思

ます。

そこで、これは私事です。兄弟にも話したこともない。ましてや他人様には勿論のこと、それこそ、私と女房だけしか知らないことなのです。不出来な子の家庭教育には私達も頭を痛めたものです。悪いと思えば体当たりで防ごうとし、痛くない体罰でビンビンやりました。少々お行儀は悪くても食事ときはベチャクチャおしゃべりしながら、その日のことを話したり聞いたり、私達は、それしか知らなかったとも言えましょう。

そして一人の子が高校のとき、校内アンケートに「一番尊敬する人は？」に「父」。まさか、とびっくりしました。(物を片づける時悪いことでしたがチラと目にとまって…)。日ごろ、ろくに教えることも出来ないくせに口うるさい親父。恐らくこの野郎くらいにしか評価してたいだろうとの先入感があったからです。

そして「理由は？」。「自分の欠点を長所で補おうとする」、私は涙が出ました。(他愛のない親バカでしようか…)

何とか大学も終えました。今時の若者にはどちらかといえば不向きな家業（紙箱業）を継ぐ決心もしてくれませんでした。実のところ私は最初から期待していませんでした。ヘイコラ人に頭を下を下げ苦勞する割にはうだつのあがらない商売、それを見て育った子、何が後を継ぐものか、と、これも、つまらぬ先入感だったわけです。かつて桑原先生が、私らに話されたことをよく覚えています。「息子に後を継げといったら、三日ぐらいものを言わなかった」と。

人それぞれに希望もあるでしょう。ましてや若い者は。しかし、よく考えてみると、後を継ぐ子を持った親たるもの、幸せといっても言い過ぎではないと思うのです……。

昔から、「子は親の背を見て育つ」といいますが、自分の背中とてまんざらでもなかったのかいな、と変な自信を持ち始めたこのごろです。

私も「小さな親切の会」の会員、「小さなことが出来ない者が、大きなことが出来るわけがない」これが私の考えです。

変な横道に外れた文になりましたが、桑原先生の玉稿

への感想にもなりますまいが、失礼なことを申しましてどうかお許し下さい。

ボーイスカウトへの道

―筆者からのメッセージ―

桑^{くわ}原^{ばら}法^{ほう}道^{どう}

（大島町教育委員会教育長）

昨日、宗務庁に注文の前進座、法然上人のビデオが届き、寺族で見ました。

すばらしいテレビです。この計画をなされた浄土宗とその協力の前進座に満腔の敬意をささげますとともに全国法の然教の皆さん是非ともご覧頂くようお勧めいたします。

さてその上巻の終りに、法然上人に「貴方は立派な坊さんになられ、その上宮中にも参上される身になられたので、もっと立派な衣をまとわれては……」と、そこで上人が、「私が立派な法衣をまったら貴方達とも口がきけなくなります。僧は大衆を教化してこそ、僧としての値打があるのです。だから私はみすぼらしい衣で充分です……」と答えられていました。

現下日本中の中学校は大荒れに荒れているのです。この時、僧として、仏教を信仰する者として、ほとけさまの教えを日本中の青少年に伝えようではありませんか。そのためには、

各寺にボーイ・ガールスカウトをつくって下さい。

各寺に子ども会、朝校をつくって下さい。

そのことが、現在に生きる者の報恩感謝の業ではないでしょうか。

八月下旬に開催された浄土宗ボーイスカウト指導者養成講習会で、宗務庁社会局長、竹田英宣氏は、「法然上人のお念仏は、ボーイスカウトのちかいとおきてにこも

り候なり。この運動を全国に広げて下さい。せめて、各教区に一つは発用することを希望します」と、まことに金言です。毎朝に、法然上人の念仏の有難いお教えを、全国の青少年に伝えようではありませんか。

◎ちかい

私は名誉にかけて、次の三条の実行をちかいます。

- 一、仏と国とに誠を尽くしおきてを守ります。
- 一、いつも、他の人々をたすけます。
- 一、からだを強くし、心をすこやかに、徳を養います。

◎おきて

- 1 スカウトは誠実である
- 2 スカウトは忠節を尽す
- 3 スカウトは人の力になる
- 4 スカウトは友誼に厚い
- 5 スカウトは礼儀正しい
- 6 スカウトは親切である

- 7 スカウトは従順である
- 8 スカウトは快活である
- 9 スカウトは質素である
- 10 スカウトは勇敢である
- 11 スカウトは純潔である

12 スカウトはつつしみ深い

以上

(浄土宗のスカウトの事を知りたい方は、

〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町96佛教大学 館憲雄先生
にお聞き下さい)

日本のボーイスカウト

ボーイスカウト運動は、一九〇七年に英国で、ベーデン・パウエル卿がはじめたものです。日本では一九二二年(大正十一年)に、後藤新平伯を総長として少年団を結成し、「一日一善」を目指し青少年の育成に努力しました。

後藤総長が少年に与えたことばに、

人のおせわにならぬよう

人のおせわをするよう

そしてむくいをもとめぬよう

と、自治の精神を強調し、奉仕の精神を教えています。その後、団員数は三十万に達しましたが、第二次世界大戦中に解散し、終戦直後、最初の全国的な青少年団体として、ボーイスカウトの名のもとに再建され、また国際復帰も実現しました。

◎編集子記

読書の秋を迎えて、皆様にはますます充実の好季をお過しのことと拝察申し上げます。この時に臨んで、心安らかに、心穏やかにお過し下さい。またお互いに一日一日を健康第一に生活しなければなりません。『浄土』誌の読者の皆様、どうかご健勝で、ご多幸の毎日をお送り下さいませ。

さて寺内大吉先生の十年に及んだ長期連載『念仏ひじり三國志』が完結し、編集子は今安堵の胸をなでおろしています。しかし誌面の方を充実させて行くことは、なかなか大変です。どうぞ心ある皆様、『浄土』誌誌面充実のためにお力添え下さい。何でも結構です。鉛筆を取って、原稿用紙に向って下さい。ご寄稿をお待ちいたしております。

(K生)

村瀬 秀雄 著

||好評三刷||

『全 訳 法然 勅修御伝』

B 6判 八四七頁 価六八〇〇円

||好評重版||

『和 訳 浄土三部経』

B 6判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然 上人 撰 択集』

B 6判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導 大師 観經四帖疏』

B 6判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導 大師 六時礼讃』

B 6判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

浄土句集

一田牛畝選

英彦山ひこさんの祖跡深緑森の中

福岡 増谷 雄鳳

評 英彦山は浄土宗二祖鎮西国師の靈跡で

青年期には一千日日参され、法然上人遷化された時、四十九日の御別時されたのもこの山で、その跡は深い森に包まれ、この度浄土宗の靈跡として指定されたのである。大本山善導寺は毎年秋に法要を行っている。

東京 栗原やえ子
施餓鬼会に孫もいっしょに手を合せ

評 施餓鬼会に祖母に連れられて参った孫

が、皆と一緒に手を合せているのは実に可愛いものである。幼い時より宗教教育は必要で、法要には孫も連れて行つて合掌するのを見せて、そんな習慣をさせることが誠に必要である。

東京 真野よし子
老身の洒落氣もありてサングラス

評 この頃の老人には洒落氣が十分あるようだ。ネクタイにしての其の通りであつて男ばかりでなく、女にその風がある。

福岡 安藤平二郎
老鶯の声しきりなり鉦山やまの跡

評 作者の父は炭坑主であつた。炭坑は今

はなくなっているので、その跡は思い出で深いことならん。そこには老鶯がしきりに啼いている。まことに、淋しいことならん。

福岡 荒牧 還愚
香水に縁のなかりし出家吾

評 老僧ともなれば香水には縁はなかつたらしいが、近頃は外国土産等よく貰うことがある、貰えば用いねば、くれた人に申訳がないらしい。

福岡 松尾 るり
香涼し宝冠の弥陀御開帳

評 幡随上人ぼんずいが幕府の命を受けて島原、天

草の切支丹に日本にもこんな美しい仏が在すと宝冠を冠られた弥陀を船に乗せて筑後川の若津の港より出発して伝道された。その弥陀が大本山善導寺に祀られている。その御開帳の香は涼しい。

福岡 林 澄山
老鶯や巖そのものが御神体

評 老鶯がしきりである。大きな巖がそ

り立っている。その巖が御神体としてみ
んなから拝まれている。

福岡 前田 秀峰

役僧の涼風入れる慰霊祭

山口 三井 寛静

大分 丹羽 難中

檀信徒集う念仏会蟬時雨

福岡 青柳 良厳

父の日や若く逝きたる父想ふ

福岡 服部 光代

草刈りて囚人墓地の盆回向

福岡 原 敬二郎

板の間の暗きにぬるりなめくじり

福岡 上滝津弾音

石段の高き古刹や法師蟬

三重 山田 歌甫

杖となり慈母となる妻夕涼み

福岡 植藤みきを

滴りの高僧彫みし磨崖仏

東京 細田 初枝

お浄土へ帰る灯籠あかあかと

福岡 深井 鉦士

真夏寂大本山の昼下り

東京 末常てる子

身近かなる施餓鬼法話に笑ひ起く

東京 吉田ゆきゑ

足だけは出すものとして浜日傘

福岡 行正 明弘

梅雨寒に仕舞し衣類また出しぬ

東京 真野 竜

そより立つビル晴れ上り梅雨終る

長野 友淵旋風子

駐車場隅に浜木綿よく匂ふ

福岡 沢河野ねはん

牡丹燃え人気配なき高野の坊

東京 田中 秀代

白百合の芳香溢れ位碑堂

山口 上野 明達

夏座敷整へ母の一周忌

福岡 稲永美恵子

顔中を口にして居り燕の子

東京 田中 秀代

東の間の晴れにしきりと秋の蟬

群馬 島津 か寿

秋の蚊や女人禁制法主の間

一田 牛畝

(仏)(教)(行)(事)(一)(年)

十月の行事

——十夜法要

驚見定信
わしみじょうしん

十夜法要(お十夜)は秋の行事である。陰暦十月にはじめられたという真如堂の伝承から、現在では十月、十一月の十五日を中心として十夜法要が行われている。十月に行うか、十一月に行うかは明確な基準はみられない。しかし田や畑の作物をとりいれる時期にあわせて、十月か十一月かが選ばれてきたとはいえるだろう。十夜法要が陰暦十月十五日を中心の日どりとするには、いろいろな解釈をみることができる。

「鹽尻」という本には、「浄土宗十月六日より十五日迄、別時念仏を唱ふ、十夜という、是弥陀正覚の日なりと……或僧白、十夜の月は無量寿下白、於レ比修善、十日十夜、勝於他方諸仏国土為レ善千歳上の文より名付し、十月は十三仏を月に配すれば、阿弥陀にあたり、十五日は毎月念仏図、十五日弥陀なり……」とかかれています。まず十夜法要は阿弥陀仏の成等正覚を祝う日である、という。阿弥陀仏が正覚に至ることは、衆生がみな救わ

れるときである。阿弥陀仏は衆生救済の願いが果されなければ正覚を取らじ、と宣言されているからこそ法要の意味は強まってくる。つまりは阿弥陀仏への感謝の法要となる。つぎに無量寿経巻下にある、此に於て善を修むること十日十夜すれば、他方諸仏の国土に於て善を為すこと千歳するに勝れたり、という経文による法要だということである。いわば十日十夜にわたる修行のすすめである。こうした法要目的に対して十月十五日の日どりが選ばれた説明が続く。十月は、不動明王、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒、薬師、観音、勢至の諸尊につづいて十番目に阿弥陀仏が位置していることにもとめられている。十五日は、観音が十八日、地藏が二十四日をあてられているように阿弥陀仏の日である、との説明による。

十夜法要は阿弥陀仏への感謝の法要であり、修行の法要でもある。それゆえ、十日十夜にわたる別時念仏が十夜法要と定義されるのである。しかしこの説明は教化者の側からのものである。これに対してうけとめた側、つまり信者の側ではもう一つの理由が必要である。十月の民俗行事である収穫祭との接触もしくは習合という側面からの説明も必要である。

〈亥の子・十日夜〉

秋の民俗行事の代表的なものは、主として西日本に分布する亥の子と東日本にみられる十日夜である。

亥の子とは、陰暦十月の亥の日、亥の刻に餅を食し、無病のまじないとする中国の俗信にもとづいた（鈴木策三）行事である。

平安時代には朝廷にとりいれられ、しだいに民間でも行われるようになった。民間では貴族や武家とは異なった意味をもつものとして定着したようである。民間での亥の子は、とくに稲の収穫を祝うことに中心的な意味がみられた。収穫を祝うことは、家族や血縁、地縁で喜びをわかちあうことだけではない。収穫をあたえてくれた神に感謝をすることである。ごく一般的には春の亥の子に田の神が来臨して、秋の亥の子に神が帰る、と考えられていたようである。田の神への感謝が亥の子行事である。

亥の子行事は「亥の子つき」に代表される。主としてワラボテか石で地面を打つ行事である。

亥の子は玄猪（いのこ、またはゲンジロ、ゲンチロウともよぶ）とも書くように、猪の字が用いられている。猪は多産であることから産育の祝（宮本常一）の意味もかきねられたが、最も象徴的には豊作を意味したのである。

つまり、亥の子に地面をたたくことは、藁ボテや石に呪力を認めて、悪霊を鎮圧し大地の生産力を増やそうとするものであろう（民間信仰辞典）と説明されている。

亥の子にかかせないものにもう一つ、餅がある。玄猪餅である。日本でも当初は、中国にならって五色の餅が用いられたが、足利時代にはいつて能勢餅が生れた。これは赤小豆をまぜたもので、栗をあしらっていた。能勢餅は宮廷や幕府にも献上されて広がった。江戸時代には城中で紅白の餅がくばられたという。町家においても、小豆をまぜた紅い餅がつかれたが、後にはぼた餅にかわることもあった。「絵本江戸風俗往来」には、この日武家方には紅白の餅を諸所へ贈る。町家にも餅の贈答ありしなり、と載せている。

餅をつく風習は貴族、武家、都市の人びとだけではなく、農村部においても同様であることはいうまでもない。

餅は亥の子のシンボルである。しかし基本的には新米を使ったものである、と考えれば餅でなくてもよいわけである。おにぎりや、きなこをまぶしたおにぎりのばあいもあった。

亥の子にはタブーもみられる。亥の子、十日夜には大根の畑にはいつてはいけない、という伝承はかなりの分布をみている。つまり物忌の日であることを示しているのである。亥の子はおこもりの日でもあった。

九州の杓岐島には十夜講が現在まで続けられている。これは一日もしくは七日間程度、地縁の人びとが村の堂におこもりして念仏をとなえる行事であるが、内容は亥の子行事である。こうした例は奈良県の十夜講（秋の涅槃講）にもみることができ。

亥の子は関東では十日夜といわれるが、この他アエノコト、案山子上げ、大根の年取り、刈り上げ祭などはよび方が異なっても内容はほぼ同じである。

収穫は最大の関心事であるから、地域や時期のずれがあったにしても伝承されてきたのである。収穫が人間の努力によるものでないことを知っていた人びとは、それが神や祖先のおくりものとうけとったのであろう。

阿弥陀仏への感謝という十夜の教えは、みのりをあたえてくれた祖霊や田の神への感謝ということと結びついてくる。

十夜法要の構成要素には収穫祭の色採が強いことはすでに指摘されてきた。日どり、供物、食習、参籠道具などに具体的にあらわれている。

いわば民俗的方法による収穫祭が仏教の教えによって、より体系的な意味づけをあたえられたのである。その代表的なものが十夜法要であつたといえるだろう。

〈十夜法要〉

十夜法要は、永享年間（十五世紀半頃）に京都の真如堂にはじまった。明応四年（十五世紀終り）に鎌倉光明寺の観誓祐崇によって浄土宗にうつされたのである。儀式の中心は比叡山常行堂に伝えられた引声念仏である。鎌倉光明寺からどのような展開をして、現在のような拡がりをもったのか明らかではない。大樹寺や八王子の大善寺には戦国時代の戦死者の供養から十夜法要がはじまったという伝承が残されている。先述した菅岐の十夜講も元

寇の役の戦死者追善にはじまったと伝えている。これらを見ると怨霊のたたりを鎮める機能もあつたことがわかる。民間定着の一側面といえよう。江戸時代になると、おもに浄土宗を中心として行われ、人びとの信仰をあつめていたことがわづかであるがみることができる。

例えば「日次記事」には、十月五日には誓願寺念仏ならびに法談と記して、「今日より十五日に至るまではれ十夜と称す。夜に入れり宗門男女群集り、各高声に弥陀号を唱う。おおよそ浄土宗院法談あり、其の始め多く永諷誦を読む」と情況をつたえている。

「東都遊覧年中行事」には、六日と記して、「今日より十四日迄を十夜とて、浄土宗の寺院、諸所に法会あり、かまくら光明寺は大寺といひ、十夜仏会の最初なれば、江戸よりも参詣多く、諸国の人群集なし、市も立て振はう」とある。大体六日が「ひもとぎ」というように、十夜法要の開始日である。十四日から十五日にかけてが最も人のあつまるときであつた。

十四日には、「深川靈巖寺、目黒祐天寺今夜より通夜の参詣多く、鎌倉光明寺、行徳徳願寺、今明日別してさんけい多し」（「東都遊覧年中行事」と載せていることから

知られる。また「増補江戸年中行事」にも、「六日、今日より十五日まで、浄土宗十夜法要、寺院説法、別時念仏等あり」と載せ、十五日には、「浅草念仏寺、深川雲光院、目黒祐天寺、両国回向院、前夜より通夜あり」と書いていた。これらの記事をつなぎあわせてみると、おぼろげながら当時の十夜法要の姿がみえてくる。

おおむね十日十夜にわたる法会が行われたこと、とくに十四日から十五日にかけてが中心的事であったこと、また十四日の夜に参籠の風習があったことがわかる。法要内容も、別時念仏、法談、諷誦文回向が行われていたことが知られる。法要の様子は「絵本江戸風俗往来」にうかがえる。引用してみよう。

「なかんずく芝三縁山増上寺は江戸將軍の御祈願所なるまま、別して十日十夜の法行おごそかなることといふばかりなく、大僧正より御靈屋付きなる八院の別当及び役僧を始め、寮主僧数百人出仕して行なわせらる。染色の法衣には七丈八丈の袈裟、金襴、蜀紅、金繡に身をまとい、品位正して看經読誦あるや極楽界もかくやと思ふばかり、恐れ尊くありがたかりし光景にこそ」とつたえている。十夜の時は寺院だけでなく、信者の側でも特別

なふるまいがあったらしい。時代はさがるが「東京風俗誌」には「……殊に相州鎌倉の光明寺は、比宗の関東総本山なれば、汽車の便を藉りて、これに参詣するもの少からず、この宗の俗家にても、餅を搗ぎ、汁子、萩の餅などを製りて供へ、また知音にも配るなり」と亥の子行事と重なっていることを想わせている。

さて十夜法要は浄土宗だけが行っているのではない。真如堂は天台宗系であり、長野善光寺でも浄土宗と天台宗の双方で行っている。そうした一つに浅草寺がある。

浅草寺は十七日に行われていた。参籠しての念仏と題目踊りが名物であったようである。「東京年中行事」より引用してみる。

——この日の午後からは、本堂に於て盛んな十夜念仏誦經があり、暮からは御供所に於て、近郷なる小岩、平井、葛西、金町、千住あたりから集まり来った爺さん婆さんの盆踊りのような踊りがあり、三十六仏堂では、又これら信徒の念仏修行がある。この踊りはもともと十夜のお籠りに来た善男善女が、夜寒の通夜の退屈凌ぎにやり始めた……以前はこの踊りは境内の広場でやったもの

だが……数年前までは念仏堂で踊ったのを近頃は御供所でやることになったのである。と書いている。浅草寺十夜の名物はこの題目踊りであった。……他方念仏修行も盛んであった。……それから三十六仏堂の念仏の方も、近郷から声自慢、拍子自慢の連中がやって来るので、お念仏の中へ入る文句は『人間僅か五十年、朝咲いて昼には萎ぼむ朝顔の、露より脆き身を持ちながら、後生を願わいでいいものか』と言うようなことがあり、それを木遣のような恐ろしい高い調子で、節こまやかに唱えては『なまいだなまいきだ』とやる。そして鉦と太鼓の面白い拍子に合わせてそれをやるのであって、その曲調が又頗るふるったものである。これが即ち念仏踊とか言うのである——。

ここには十夜には参籠の様態がいきいきとみえてい

る。

近世の年中行事を記したのから十夜法要の姿をおってき。十夜法要が別時念仏を中心としながらも、さまざまな儀礼目的をもっていたことがわかる。また参籠や食習などに民俗的な要素が強く混入していることもみて

きた。十夜法要が、阿弥陀仏による浄土往生を中核とした信仰から、展開の過程でさまざまな意味をもつけ加えてきたことは興味深い。とくに民俗信仰を儀礼のなかにとりこむことができたという点が重要である。いわば人びとの宗教的欲求が民俗信仰にあらわれている、とみれば十夜法要が今日まで伝えられてきた理由の一つは明らかとなりそうである。

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。大
本山善導寺のご法主、一田先生も大変にはりきつ
ておられますので、お友達などとお誘いあって、
ふるって作句して下さい。

一 投稿先——

。〒812 福岡市博多区中呉服町10—14

正定寺 一田牛畝先生宛

。〒102 東京都千代田区飯田橋1—11—6

法然上人讃仰会

昭和59年度版

浄土宝暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和59年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 32ページ

1 部単価 65円 (200ブ以上 60円)

送料実費 (400ブ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

..... お申込み

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

◎読者の皆様へのお願ひ

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十九巻 十月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十八年九月二十五日 印刷
昭和五十八年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＜『浄土』誌に連載された大長篇歴史小説＞

待望の本格八仏教／歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに全巻発売中！！

念佛ひじり三国志

—法然もわづる人々—

寺内大吉 著

四六判・上製 全五巻 (各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円)

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

—第一・第二・第三・第四・第五巻発売中—

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替(東京)四一五六五三四

第四十九巻

十月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十八年九月二十五日印刷 昭和五十八年十月一日発行